

TETTO COLUMN ～館長のつぶやき～

🗨️ 「気持ちを素直に伝えたい」 2022/4 「RE:TETTO」 No.52

ヨーロッパでは今でもオペラなどを鑑賞する時にはそれなりの格好（服装）をしていないと受付を通れないとか、静かな音楽の場面では息をのみ、物音を立てないよう我慢し周囲への最大限の配慮を行うなど、確かにクラシックの演奏会には敷居が高い場面があるようですね。もちろん日本でもクラシック音楽愛好家はヨーロッパ寄り?の行動をとることが多いのですが、私はもっと聴く側としての「素直で自然なふるまい」がクラシックコンサートの中にあっても良いのではと思っています。感動したら演奏の途中（楽章のあいだなど）でも拍手をすることで気持ちを伝えとか、もちろん周囲の方々への配慮は必要ですが、演奏者に向けてもっと自分の気持ちを素直に伝えるにはどうしたらよいか日々考え中です。



🗨️ 「運営委員会」 2022/5 「RE:TETTO」 No.53

今回は少しまじめなお話。釜石市民ホールでは年に2回、外部の有識者や地域関係者、関連行政担当者による「運営委員会」という会議を開催しています。委員の数は現在9名。釜石市民ホールの現状（事業や収支など）について私たちが報告を行い、委員の皆様からご質問や忌憚のないご意見を頂戴するという、ホールにとってはとても身の引き締まる思いの会議です。もちろん難しい内容を議論することもあります。私がこの会議で一番に心掛けていることは、委員の皆様からのお話（ご質問・ご意見）を伺う時間をたくさん取るということです。自由闊達な意見の中に、ホール運営にとって宝物のようなヒントやアイデアが潜んでいることが多々あるからです。これからも市民の皆様のご意見をホール運営に生かしていけるよう努力していきます。



art at TETTO Vol.4 切り絵作家 / 黒須由里江

🗨️ 「つながる」 2022/6 「RE:TETTO」 No.54

5月4日（水・祝）に「フェルトン星人をつくろう!」という、トートバッグにフェルトの型やリボン、ポンポンを貼り付けてオリジナルのバッグを作るワークショップ（創作イベント）を開催しました。講師の青木春菜さん（東京芸大卒）は東日本大震災のボランティアとして釜石に入り、創作を通して被災者に寄り添っていただいた方です。青木さんは現在東京芸術大学学長である日比野克彦さんと共に釜石に入った際に、日比野さんと親交のある当社（釜石まちづくり会社）社員を紹介され、自分の作品（マザー・シャモジという大型のフェルト作品）をTETTOに常設展示するという運命に。TETTOとのつながりもでき、今回のような子どもから大人まで参加できる、とても楽しいワークショップが実現したのです。これからも「出会い」を大切に、未来に「つながる」ホール運営を行ってまいります。マザー・シャモジも是非ご覧ください。



右：mother shamoji(マザー・シャモジ)

🗨️ 「ホールは静かなもの？」 2022/7 「RE:TETTO」 No.55

釜石市民ホールには無料でご利用いただけるスペースがたくさんあります。1階の共通ロビーと2階のホワイエ、その他に3カ所のテラスがあります。また催事がない時にはギャラリーも丸テーブルを置いてフリースペースとしてご利用いただいています。さて、どんな方々が利用しているのか？一番多いのはちょっとした打合せや数名での話し合いでしょうか。夕方には学生の勉強の場となり、フリー Wi-Fi を活用しパソコンで仕事をする人もぼちぼち。週末には中学生などが通信ゲームなどをしているのも見かけますね。総じて「静か」な使い方が多いようですが、TETTOには外の屋根のある広場も含めて「賑わいの創出」という側面もあるのです。時間帯、程度にもよりますが、譲り合いながらの「賑やかな使い方」があってもよい私は思っています。ご提案などございましたら是非ホールスタッフにお声がけください。

